

会員の広場



地域とともに生きる

原田 幸春（東京）

地震津波いきものごとくに迫り来て
形あるもの無にして去れり

東日本震災の映像を見ての気持ち留めた自作の一首だ。横浜市消防局の「地震避難三原則」には、①その場に合った身の安全、②火の始末、③隣近所の助け合い、とある。3・11を経て、「無事」であることは「当たり前」のことではなく、まず「自分で自分の身を守る」、しかる後に「助け合い」とつくづく感じた。

食料、さらに防災用品の確保まで、実態が徐々にわかってくるにつれ、気の遠くなるような改善課題が続出する。行政を頼りつきりにせず、「自分で自分の身を守る」ことが、防災避難の第一に掲げられている意味がよくわかってくる。

会社勤めの頃、長年にわたり危機管理に携わってきた者として、危機を初めから限定的にとらえて対応するなど、まことに滑稽なことと理解してきた。3・11によって、こんな大事さえ起こりうるのだと知らされ、何事も「杞憂」と笑ってはいられない。富士のお山も活きているのではとも思う。

過去の事例を地道に調査してきた学者たちによって、今回の大津波が想定外ではないことは明白にされているのに、これらの意見は取り上げられてこなかった。同時に大地震の過去の事例が危機管理に活かされてこなかった。原発事故についても、いくつもの参考事例があり、そして30年も以前に米国で初期のシステムの

一昨年の4月から町内自治会の役員を仰せつかつている。これまでかわりはほとんどなかっただけに、地域について考えるよい機会となっている。毎月の小学生一斉登校日での案内。また眠いのか、やや元気がない。鎮守様の夏祭り。神輿の担ぎ手にも人口高齢化の波が押し寄せている。敬老の日には、該当のお宅に一軒一軒回ってお祝いを届ける。さらに秋の町内運動会、防災訓練、そしてもちつき大会、暮れの防犯パトロール。これで、年内の行事は一段落する。

みなさんが和氣満々と、心を合わせゆとりを持って、行事に携わっているのが印象的だ。町の長老は、この「和氣満々」が大切であり、それが「いざ鎌倉」の時に役に立つと強調する。ここにはマニュアルなぞなく、その時々におのずからリーダーが生まれる。リーダーには想定外はない。どの「ボタン」を押せば何が出てくるか、頭に入っている。

3・11以降、避難場所の見直しから始まって、水欠陥が指摘されていたともいう。今回の災害対応を徹底検証し、まずあらゆる事態を想定する。国、地方は役割分担を明確にしつつ、地域の力、「無料奉仕」「助け合い」を大いに活用していきたい。

米国第35代大統領ジョン・F・ケネディの就任演説に「国があなたたちのために何ができるかでなく、あなたたちが国のために何ができるかを問いかけて」という有名な一節があるが、これは、3・11後のわれわれへの問いかけでもある。「自治体と民間が運営する都市」という翻訳書には、公選の市長・議員がシテイマネージャーを選び、警察や消防など一部を除き一般行政事務は民間に委託する米国ジョージア州のある市の試みが掲載されている。改めてリーダーシップの意味を再認識したいものだ。

などと考えつつ、波乱の辛卯年は暮れゆき、壬辰年が明けた。談志の「芝浜」でも聞きながら、まずは輝かしい新春を祝うことにする。